



友人の死

「オランダ・ベルギーの旅③」

友人が帰天した。彼女の死はオランダ・ベルギーの旅に直接、関係はないが、旅から帰って、妻が現地で購入求めたフェルメールの「真珠の耳飾りの少女」の絵葉書を送っていた。出発前にオランダなどに二人で旅をする手紙を出したので、その帰国報告のつもりで書いたのだが、珍しく返事が来なかった。「体調が悪いのかもしれない。一度見舞いに行こうか」と話し合っていた矢先の訃報だった。

友人が帰天した。彼女に侵されていた。女の死はオランダ・ベルギーでも「感謝と喜びをもってすべてを神に委ねる」と妻への手紙にあり、自分がそのような状況にあってもそのことには一切触れず、左半身が不自由な妻を励ます言葉ばかりであった。彼女と初めて会ったのは福岡・宗像の黙想の会での二カ月に一度の地区学習会。下関長府教会から毎回仲良く三人の婦人が参加された。私は「三娘」と命名して親しくなり、昨年春の長府教会の

長府教会での葬儀ミサ



バザーに招かれた。その時はまだ元気だったが、今年のパザールでは短時間、客とのバザーを見た最後となる。女の顔を見た最後となる。ガンといえば、キューバ出身のチリノ神父を思い出す。半年の命と告知されたが「ほかの病気と違い、死の準備ができる

だ。人は誰でも死ぬ。貧富や権力などに関係なく誰もが公平に死を迎える。本来もつと身近な問題として参加され、それが彼女の顔を見た最後となる。あるにもかかわらず、その現実を目を閉じ、死を避けて生きている。だから死に直面するとうろたえるのかもしれない。死は巡礼の最大のテーマ

のでうれしい」と言われ、告知通り半年後に帰天された。

彼女の死は私たちにとつては突然であったが、神父同様、死を自覚し、それを受け入れていたように感じた。貧富や権力などに関係なく誰もが公平に死を迎える。本来もつと身近な問題として参加され、それが彼女の顔を見た最後となる。あるにもかかわらず、その現実を目を閉じ、死を避けて生きている。だから死に直面するとうろたえるのかもしれない。死は巡礼の最大のテーマ



別れの便りとなったマウリッツハウス王立美術館で買い求めた絵葉書